

大阪 ■ ■

No.37 2007.1.1.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2007

哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 oisp@mac.com (臨時アドレス)

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【Net Forum】 ホームページに掲示板を開設

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

■ ■ 通信

二〇〇七年を迎えて

「終着点」と憲法九条

山本 晴義 (校長)

一

2006年は私にとって大きな転換点の年でした。いろいろの事情——もはや限界に達した本の整理と処分や百一才はじめ次々おこる近親者の看病など——で、哲学学校はじめ多くの人びとに励ましていただいて、やっと11月宝塚の山の上に安住することが出来ました。

それと話が異なりますが、11月7日のアメリカの中間選挙で、ブッシュ政権が大敗し、イラク戦争に対するアメリカ国民の反対、ブッシュの「新保守主義」「新自由主義」、単独行動主義や先制攻撃主義が国際的にも孤立していることが明白になったのは、私が出席したどの忘年会でも歓迎され、最近の「鬱陶^{うっとう}しい」世相の中で皆の心を明るくしました。

二

イギリスのコラムニスト、ジェイコブ・ワイズバークは『フィナンシャル・タイム』紙の中で(11月23日)、「アメリカ政治の保守時代は、中間選挙で終わりを迎えた」。20世紀になってアメリカは「パクス・アメリカーナ」の中で「リベラリズム」(ニューディール、フォーディ

ズム)の時代、「ニュー・レフト」の時代を経て発展してきたが、今、アメリカは「80年、レーガンに始まった保守革命のエネルギーが燃え尽き、新自由主義(福祉の削減、市場万能、規制緩和、資本の競争力強化、格差の拡大)的なグローバルイズムの支配の連合が壊れ、理念も消え、終着点に来ている」と規定しています。では「次の世界は」どうなるのかとたずねています。

三

現在、小泉内閣を継ぐ安倍内閣は、この様な世界の流れに逆行し、異様に保守革命に固執し、ブッシュ政権に追随し、憲法、教育基本法を精神を抹殺しようとしています。私は以前に書いた拙著『現代思想の稜線』(勁草書房)、『現代アメリカの社会思想』(ミネルヴァ書房)などで、アメリカのニューディールとその思想——ジョン・デューイの社会民主主義や60年代の公民権運動、スチューデント・パワー、ベトナム反戦、フェミニズムや環境保護運動などその思想について紹介し、現在の新しい「世界システム」は、かつてのコミンテルン、「スターリン主義」的な「旧左翼」のように国権主義・官僚主義的な「唯

一前衛党主義」や教条主義ではなく、「社会」のさまざまな領域における多様な諸集団による「陣地戦」(グラムシ)をローカルにグローバルにたたかうことにあることを主張しました。

四

当面の私の課題は、燎原の火のようにひろがっている草の根の「九条の会」が2年余の間に6千に達しているなかで、この「戦争のない世界」への“さきがけ”になろうとした60年前(1946年)の日本国憲法の歴史的・思想的な意義を、とりわけアメリカのリベラリズム、ニューディール、日本占領期のGHQ/S

CAP(連合国最高司令官総司令部)における「ヘゲモニー」との関連において明らかにすることです。

また、もともと社会問題に強い関心を持ち、「協力的知性」「集合的習慣」「コミュニケーション的行為」による「公共的社会主義」を説いた(1935年)デューイの市民運動、平和運動、政治運動の発展についての的確な評価、なかでも憲法九条の思想の源流だとされる第一次大戦後の戦争追放運動、「戦争禁止アメリカ委員会」(1921年)の思想の研究は重要だと考えています。(2006年12月)

新年を迎えて—大阪哲学学校の二〇年を振り返りつ

平等 文博(運営委員長)

二〇〇六年は、大阪哲学学校の開校二〇周年という区切りの年でした。運営委員会では記念に何か催しをしてはどうかと検討したのですが、世代交代の過渡期で特別なことをするだけの余力がなく、今回は見送って二五周年を期そうということになりました。その代わりというわけではありませんが、新年にあたって哲学学校の二〇年を少し振り返ってみたいと思います。

大阪哲学学校が大阪唯物論研究会哲学部会の新しい活動としてスタートしたのは一九八六年のことです。設立母体である大阪唯研哲学部会自体も、一九八〇年に『季報・唯物論研究』を発行し、いかなる政治党派からも自立した研究団体として再出発していました。

折にふれ述べていることですが、哲学学校が生まれる機縁となったのは『現代日本の宗教』(山本晴義編著、新泉社)に結実した共同研究でした。七〇年代半ばごろから顕著になった「宗教回帰」現象を批判的分析の対象としたこの共同研究は、同時に、草の根に広がる宗教イデオロギーに比して、ごく普通の市民にとっては哲学的思考が無に等しいというこの国の現実をあらためて私

たちに突きつけました。従来の研究会の枠にとどまらず日常生活世界に打って出て、「生活現場と哲学の結合」の場となる哲学学校を創ろうというアイデアは、そこから生まれました。

ちなみに、名称に「学校」とつけることについては当初、近代の社会システムのなかで制度化されたそれと区別できないのではという意見もありましたが、「生活現場と哲学との接点」「対話を通して哲学することを学ぶ」という位置づけを明確に謳うことを確認して「大阪哲学学校」という名称が採用されました。その後、英語表記をめぐっても、運営委員会で議論した結果、単なる学校ではなく「自立した(independent)」という形容詞をつけて大阪哲学学校(Osaka Independent School of Philosophy)の性格を明示することになります。

ついでに言えば、市民による自立した学びの場という意味では、大阪には中井竹山・履軒兄弟が教え富永仲基・山片蟠桃らを輩出した懐徳堂(1724-1869)という町人の学習活動の伝統があり、大阪哲学学校はその歴史的継承者と自負して、日本思想史講座で懐徳堂とその思想家

たちについて学び、また史跡のフィールドワークもしました。

話を元に戻すと、もちろん哲学学校は、ただ研究会の内容を誰にも解りやすくした、水で薄めたようなものであってはなりません。生活現場からの問題提起、生活者としての問題意識、それらをベースにし問題と格闘しつつ「哲学する」ことを学ぶことのできる場、哲学的（批判的・原理的・総体的）に考えるという知的な構えを市民に根づかせる文化運動、簡単に言えばそれが哲学学校の目指したものであったと思います。

山本晴義校長のもと、開校にあたっては、今はいずれも故人となられた秋沢修二、大井正、船山信一というそうそうたる方々が哲学学校の趣旨に賛同され、顧問となることを快諾くださいました。そして一九八六年五月十八日、大井正さんらを招いた開校記念パネルディスカッション「天皇制を哲学する」をもって、大阪哲学学校は産声を上げたのです。天皇裕仁（昭和天皇）のいわゆるXデー（死去の日）が迫るなかで、緊張感に満ちた船出でした。



それから早二〇年、「天皇制からセックスまで、テーマにタブーを設けない」と謳った哲学学校は、真夏と年末年始をのぞき二週に一度の開催というハードスケジュールをほぼこなしながら、さまざまな問題を議論の俎上に乗せてきました。

開校以来四百回を超える催しとしては、講演会、読書会、連続講座、シンポジウム、恒例の夏合宿、新年交流会などはもとより、ベルリンの壁崩壊をはさんだ一九八七年と一九九〇年の東西ヨーロッパ、一九九九年の中国と、三度の海外研修旅行も実施し、各地で哲学研究者との交流活動をおこないました。

一九九五年には、十年近くの活動のなかで参加してきた人たちが哲学学校の運営にもっと主体的にコミットしてもらえるよう運営委員会を設け、大阪唯研哲学部会から自立した市民の手によるユニークな哲学的文化運動として再出発し、現在に至っています。

このように二〇年に渡って「継続こそ力」と続けてきた哲学学校ですが、哲学学校の初期を支えてくださった会員も多くが高齢や転居などでリタイアされ、スタッフ・メンバーも仕事の多忙や老親介護、体調不良などにより活動力の低下が近年顕著になってきています。哲学学校の世代的継承が緊急の課題となっています。

一方で、哲学学校をとりまく社会的思想的状況を見ると、「強者」にのみ有利な競争至上の格差社会化の進行で人と人との絆が分断され、未来がますます不透明となり、人びとの深まる孤立感や不安感を当て込んだ「心の癒し」ビジネスが横行するなか、教育基本法や憲法の改悪がまともな議論もないままに崩しに推し進められようとしています。しかし、そうした戦略なきイデオロギー政治は、意外に早く馬脚を現すかもしれません。

「生活と哲学の結合」というわれわれの目標を今一度掲げなおし、若い世代を巻き込んで時代を映す生活現場の課題と取り組むべき再々出発のステージに、哲学学校は入ろうとしています。

新年会によせて

伊元 勇（運営委員）

会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

御挨拶の言葉の中にも、挨拶ゆえにそれなりの歴史経緯があり、忌避する人はもちろんめでたくない人がいます。社会性の表れたる標準化としての挨拶は記号化表象化を帯び、新たな概念意味が絶えず敷衍拡大変質されている故、最適化できず個々人の不都合などお構いなしに一方通行に投げかけられる道具のため、本来の意味とかけ離れた穩噺と受け取られることもあります。今回は投稿でありどうぞ御容赦いただきまして、グローバリゼーションの最たる西暦の新年にあたり御挨拶申し上げます。（やっとたどりつけた）

普段聞けぬ会員の皆様の生の声をお聞かせ頂ける新年会もまた、大阪哲学学校の欠かせぬ恒例の行事ではありますが、哲学学校の運営内容に関して、日頃私からブツブツ文句を言われ続けた平等運営委員長から今回指名で企画を与り、「学生運動と退職する団塊の世代」を主なテーマに、学生運動当事者が多そうな大阪哲学学校会員からじかに生の声を聞きたいなあ、と考えました。

一回り遅れた世代でノンポリの私にとって、報道される大学の学生運動自体は実感のないものでしたが、その影響で新聞地域版に載るくらい緊張感のある中学時代になってはいたのは確かです。自分たちの後のシラケ時代と呼ばれた

世代との間にあっては、おいしいとこ取りやがってとか、なんで勝たへんねんとか、自分らだけ盛り上がって、とも思っていました。

どこの大学やらどこの団体やら皆目知らないまま、芸術の世界に惹かれていたため、思想哲学なんてあまり縁のない学校時代でしたが、ありていに言えば呪術の世界であろう芸術の言語化に興味を持ち、言葉の世界へ遅まきながら入ってきたわけです。ですから身体性との往復運動が自分のやり方であり、実践と思索をしつつも、それぞれに拘泥しないことが私の強みかもしれないと思っています。その立場からするとあの当時の学生運動はその思想主張そのものより、その身体性が表現したものを見過ごすべきでなく、むしろ非常に大きな意味があったのではないかとます。例えば表面的な騒々しさが倫理的や社会的ではなく、身体性の破壊的発露に乗せた一表現ではなかったかと考えます。主張内容そのものより主張する態度や感情によって、その身体性の表現が言葉を浮遊させ、無化し、新たな多様性をその瞬間引き出したのではないかと想像してしまいます。しかしその多くは就職と同時に消え去ってしまったのでしょうか。

団塊の世代の第二の人生が新たな社会的に大きなムーブメントに繋がる、が私の今のところの予感です。しかし熱き思いは同じなれど、はいつも思うけれど……。新年会に期待します。

新年 会員・参加者交流会 毎年恒例、新年の抱負など大いに語り合う集い

- ◆2007年1月27日（土）午後3時～7時ごろ ※時間注意
- ◆尼崎労働福祉会館にて ◆参加費千円（軽食・飲み物付）
- ◆フリートーク「団塊の世代と日本のゆくえ」ほか

今、一番関心のあること

野村 光夫（会員）

僕の今、一番関心のあること、それは哲学です。哲学でもハイデッガー、「存在論的現象学」です。ニーチェの「永劫回帰」の思想も興味を引きます。ハイデッガーもニーチェもドイツの実存主義の哲学であると思う。実存主義といえばサルトルもいるけれども、やっぱり上述の二人が僕の興味を引きます。

ハイデッガーの思想が何故、僕の興味を引くかと言うと、それは、彼が『存在と時間』(Sein und Zeit)を書いたからです。『存在と時間』が何故、僕の興味を引くかと言えば、それは、多分にドイツの哲学の最高傑作の一つだと思うからです。何故『存在と時間』がドイツ哲学の最高傑作の一つかと言えば、時間とは自分のことだと思うからです。「自分」とは何か？ それは、古来から論じられて来たことだと思うが、ソクラテスも「汝、自身を知れ」と言っているように、自分を知ると言うことは、世界を知ることだと思うのです。世界とは何か？ それは誰でも世

界一周等と言って誰でも旅行などしてみたいと思うものでしょう。当の自分も一度は世界旅行位したいと思う。このように誰でもが憧れるのが、「世界」だと思う。

ニーチェの「永劫回帰」の思想、それは今の僕にはも一つよく分からないのですが、ニーチェと言う人は、ドイツ哲学でも孤高の人であったのではないかと思うのです。彼は生涯精神錯乱の状態にあったらしいが、何故ああまでもキリスト教を否定したのか？ それは、僕にも分からない。只、彼が純粋な精神を持っていたのは否定出来ないと思う。

以上で今の僕の一番関心のあることを終わるが、兎に角、僕は哲学が非常に好きだということです。

私の目指している哲学は、ハイデッガーの「存在と時間」や、田辺元の哲学です。これからは、それらを読んで、勉強していきたいと思います。

(2006年6月5日)

大阪哲学学校活動日誌 (「通信」36号発行以降)

- 2006 7. 8. 「大阪哲学学校通信」第36号発行
7. 8. <知の歴史> 入門講座第5シリーズ
「マックス・ウェーバー入門—『プロテスタンティズムの倫理』から〈人でなし〉の支配する近代社会を問う」(第2回) ……………講師・青江 透
7.22. 同 (第3回)
8.27. 2006年夏期合宿(季報『唯研』刊行会、大阪唯研哲学部会と共催)
～ 28. シンポジウム、交流会、研究発表 ※詳細は本号前頁を参照
10.14. <知の歴史> 入門講座第6シリーズ 「ヘーゲル『精神現象学』を読む」
第1回「モノと力」 ……………講師・田畑 稔
10.28. 同、第2回「力と悟性」 ……………講師・田畑 稔
11. 4. 大阪哲学学校第12回(2006年度)総会 ※詳細は本号15～16頁を参照
11.18. <知の歴史> 入門講座第6シリーズ 「ヘーゲル『精神現象学』を読む」
第3回「主と奴の弁証法」 ……………講師・田畑 稔
12. 9. 現代中国の「三農問題」をめぐって～「草の根中国農村交流ツアー」に参加して
……………講師・山口 協

Poème

訪問販売

上野山 定由（会員）

自転車をはたてて

アイスクリームでも売っているのかと思っていたら

荷台に立ててある赤い三角の旗には

経口避妊薬 愛のピル と書いてある

男は うす汚いタオルで 顔の汗をぬぐうと

メガホンで 六階建の団地にむかって喋りだした

暑いさなか お騒がせいたしましたして申し訳ありません

しばらくの御辛抱をお願いいたします

みなさまの御家庭に 愛のピルをお届けにまいりました

発売許可がおりたばかりの最も新しい薬です

一錠飲めば三か月は有効で 副作用は絶対にありません

奥様方 どうか可愛いお子さんを

この惑星に お連れにならないで下さい

お子さんたちにとって どんなに惨いところであるか

奥様方は 御存じのはずですが

御自分が 子供のときから大人になるまでに

どのような目に遭われてきたか

胸に手を当てて思いだして下さい

深い傷口でも 時がたてば癒えていくように

多くのことは 忘れてしまっておられるのです

それでも 辛かったり 悲しかったり 淋しかったことが

胸に刻みつけられて居るのではありませんか

しつけ一つをとって見ても

小さい時から厳しくと云うことです

嫌がって泣こうが 無理矢理しつけられる

この惑星では しつけられた者でない

受け入れられないのは 身をもって知っておられる

お子さんを この惑星にお連れになれば

御自身が経験された辛かったことを

可愛いお子さんにも 味わわせるようになるのです

心優しい奥様方のなさることではありません

只今から一軒々々お伺いして 愛のピルをお届けに参ります

一ケースに一〇錠入っていて 原価そのままの千円です

二〇〇六年夏期合宿の報告

木村 倫幸（参与）

時期的に遅くなりましたが、今夏合宿の報告をします。

恒例の合宿が、8月27日から28日まで開催されました。今年の開催地は、日程の事情で候補地探しに苦労しましたが、JR吹田駅と阪急吹田駅近くの常光円満寺という寺院を見つけることができました。

季報『唯物論研究』刊行会・大阪唯物論研究会哲学部会との共催で、夏休みの終りの忙しい時期にもかかわらず、埼玉、名古屋などからも参加され、14名の皆さんが集いました。

第1日目の研究発表は、「ヴァーチャルとは何か？——デジタル時代の存在論をめぐる」という題目で、ピエール・レヴィ『ヴァーチャルとは何か？——デジタル社会におけるリアリティ』（米山優監訳、昭和堂）を参考図書として行われました。松岡鉄久さんからは、ヴァーチャルという言葉の意味（伝統的な意味、コンピュータ技術の領域で定義された意味）、ヴァーチャル化の特徴（今ここからの脱出、メビウス効果）、デジタル時代の存在論（テキストのヴァーチャル化、経済のヴァーチャル化）をめぐるの報告が行われ、村山章さんからは、コンピュータ技術におけるヴァーチャルという語の使用、シ

ミュレーション技術の進歩、ネットワークの発達、複雑性の科学等との関連について報告がありました。また木村からは、ポテンシャル化がリアル化に、ヴァーチャル化がアクチュアル化に対する概念としてあげられていることに着目してヴァーチャル化を論じる必要があるというコメントがあり、その後、デジタル化やネット等の現状を絡めての議論がありました。

当日夕食後は交流会ということで、JR吹田駅近くの居酒屋で歓談。いろいろな話題に花が咲きました。

2日目午前中は、研究発表「グラムシ哲学ノートの研究」でした。まず尾場瀬一郎さんからの「グラムシとコモン・センスの思想」の報告では、コモン・センスの概略、古在由重によるコモン・センスの説明、グラムシのコモン・センス論が紹介されました。続く田畑稔さんの「グラムシ哲学ノート・私の研究——解雇と課題」では、獄中ノートの全体構成に関して「鳥の目」で哲学ノートをどう位置づけるか、クローチェ哲学との関連、ブハーリンとの関係等について報告されました。また松田博さんからは、「グラムシ『哲学ノート』研究についての雑感」というメッセージをいただきました。そして70周年準備会についての報告があり、すべての日程を終了しました。

このように今年の2日間の合宿も、久しぶりにお会いした皆さんとさまざまな議論を残して終了してしまいました。来年の合宿にも多くのみなさんが参加されることを心待ちにしております。また合宿でいろいろとお世話をいただいた参加者の皆さんに心から感謝する次第です。



ファンタジー「人間論の大冒険」 第五話

プロタゴラスの人間論

やすい ゆたか（会員、講師）

駄洒落にてはぐらかすのも弁論か、
酔い回りなばさえも曇りぬ

人の道を踏み外して、奈落に落ちた上村 陽一は、しばらく意識を失っていたが、青年が肩をたたいて、起こす声に目覚めた。「ギリシアを代表する徳の教師、ソフィストの元祖プロタゴラス先生、こんなところで居眠りされると風邪をひかれますよ。今日はまだ始まったばかりなのにすっかり酔ってしまわれたのですか。」

「え、私の名前は何と言われた？たしかソクラテスと言われたようだが。」「ご冗談を、ソクラテスは私ですよ。あなたは今やギリシア最大の知者、弁論にかけては神々も顔色なく、お話の巧みさでは、ホメロスも生きていれば脱帽すると言われているプロタゴラス先生ではないですか。」上村 陽一は目をこすりながら、思い出そうとしたが、なかなか出てこない。

「何もない、あっても認識できない、認識できても、伝えられない」と言った。すると、「ひどいな。それは私ゴルギアスの台詞じゃないですか。」「あれあれゴルギアスさんもいたのか、おかしいな、私の記憶ではゴルギアスさんはいなかった筈だが。」たしかにプラトンの『プロタゴラス』ではゴルギアスはいなかった。まあそれは気にすることもないか。

「そうそう思い出したよ、万物のしゃもじは人間である。あるものについてはあるということの、あらぬものについてはあらぬということの。」「ア、ハ、ハ、ハ」ゴルギアスは笑った。「しゃ

もじじゃなくて、尺度でしょ。今日のプロタゴラス先生は徳の教師というよりも駄洒落の教師ですね。」「なに、駄洒落の教師だと、駄洒落をいうのはだじゃれじゃ」と親父ギャグの連発である。

ゴルギアスが解説した。「これは駄洒落ではぐらかす弁論術じゃよ、ソクラテス君、今日はどうも酔っ払っていて頭が冴えないから、はぐらかし戦術らしいな、プロタゴラスさんは。」ソクラテス青年は、あきれた顔をして、「駄洒落ばかりでは、とても徳は教えられませんね、プロタゴラス先生、徳の教師だとおっしゃる先生の看板が泣きますよ」と皮肉った。「ソクラテス君は、自分は何も知りませんと言う割には、徳は教えられないと知っているようなことをいうじゃないか。徳の教師を名乗っているのだったら、徳を教えるのは、特に得意なんじゃないかな、プロタゴラスさんは、ア、ハ、ハ、ハ」とプロタゴラスは笑って応えた。

数学や文字を教うるごとくして
徳教得るや教え得ざるや

「いや、私には徳は教えられるか、教えられないかは分かりません。ただ駄洒落の連発なので、教えられないということかなと先生のご様子から推察したまです」と例によって「無知の知」の立場を表明した。

「徳は教えられるよ、じゃあ教えてあげよう、徳はアレテーです。」一同ずっける。「そんな、それはただギリシア語で言っただけじゃないで

すか。問題なのは徳の中身ですよ。」ワッフンとプロタゴラスはおもむろにせきをしてから言った。「ギリシアの四元徳といえば知恵・勇気・節制・正義だな。」上村 陽一は倫理が得意だったので、そういうのはすらすらと出てくるのだ。ソクラテスは肩をすぼめた。ゴルギアスは苦笑しながら「今日のプロタゴラスさんは愉快だな。ソクラテス君はそういう知恵・勇気・節制・正義などを数学や漢字の知識のように教え込むことができるかどうかをたずねているのだ。」「ゴルギアス君ここは古代ギリシアだよ。漢字なんて誰も知らないし、まだ中国では漢になってないよ。」ゴルギアスは、舌をだしていった。「そんな細かいところにこだわるなよ」

上村陽一はプロタゴラスとソクラテスの徳は教えられるかについての対話については、どこかで聞いたような記憶がある。いや何かで読んだ記憶である。実は、榊周次のホームページに「プロタゴラスの人間論」の紹介があって、大変印象的だったのである。しかし「人間論の穴」に入っているとどこでいつどういう記憶を仕入れたかは思い出せないことになっている。ただ陽一はこの話は自分の中にインプットされている気がして、なんとかかなりそうだと思った。「ソクラテス君、じゃあ徳が教えられることについて、ひとつお話をしてみよう。」いよいよプロタゴラスの得意の物語形式の説明が始まるというので、富豪カリアス邸に集まった一同はプロタゴラスに視線を集めた。

万物の真理をはかる尺度とは
人それぞれの感じとるまま

「神話の形をとって話をすすめてみよう。まず人間とは何かを考えるとしよう、そうすれば、人間に徳が教えられるかどうか分かるから。」ピッポクラテスがたずねた。「先生の人間論は、人間とは万物の尺度であるという人間論ではな

いのですか？」プロタゴラスは首を振った。「いやいや、それは全くの誤解だよ。あれは真理はひとそれぞれという言う意味なのだ。この部屋が暑いか寒いかはひとそれぞれだろう。たっぷり着込んだり、熱いものを食べている人にはこの部屋は暑すぎるが、薄着や冷たいものしか食べていない人には少々涼すぎるかもしれない。それを気温だけ取り上げて、今何度だから暑いというのは間違いだ。サウナ風呂だと摂氏八十度台でも寒くて体が震えだす者もいるらしい。つまり真理は人それぞれで、自分が感じたのが、自分にとって真理なのだ。だからだれか権威のある者にこれが真理だといわれても、簡単に信じていけないということだ。あくまで真理は人それぞれ相対的なものだという事なのだ。」

神々は土に水まぜこねまわし
火にかけ作りぬ生き物たちを

ピッポクラテスという名の青年は納得した。「なるほど、では早速プロタゴラスさんの人間論をお聞かせ願います。」彼はなかなかの美少年である。三輪智子が演じているのだ。上村 陽一はどこかで見覚えがあると思ったが、だれかはわからなかった。プロタゴラスは無言でうなづいて語り始めた。「昔不死なる神々は、自分たちは不死なものだから命がけで何かをすることがない、それでどうにも退屈な日々にあきあきして死すべき定め動物たちを作ろうということになった。それで土を水で混ぜて捏ねあげ、思い思いの形にして、それを火にかけてつくったのだ。」

カリアスはそこで口をだした。「そしたら動物たちは陶器だったのですか、プロタゴラス先生。」「カリアスさん、それはわれわれ人間が煮炊きや焼き物に使っている火のことでしょう。神々が使う火は命の火なのです。それで焼くと獣たちの体ができるらしいです。」プロタゴラスは、オ

リンボスの山に神々が住んでいるなどまったく信じてなかった。でも神話を好んで創作したが、それは自分の説明に都合のよいように話を作るからだ。

「その後で、それぞれの動物たちが滅びないように、特性を与える仕事を神々に命じられたのが、われわれ人間の思考を司る二柱の神々だ。ピポクラテス君、その神々の名前は？」

ピポクラテスは急に振られたので少し驚いたが、「想像力や構想力をつかさどる先立つ思考つまりプロメテウス、彼は兄です。そして反省や後悔を意味する後立つ思考つまりエピメテウス、彼は弟です。」「どちらが担当したと思う、ピポクラテス君。」「相談して二人で与えたのでしよう。どちらかだとやはり兄プロメテウスが適任でしょう。だってエピメテウスは将来のことは考えないで、思いつきでいろいろやりますが、後からうじうじ後悔するタイプですから。兄はしっかり未来を見通して行動できるので、信頼感がもてます。」

後悔は先に立たずや人にまだ
サバイバルする特性与えて

「これはお話だからね、問題が起こるからお話になるんだ。エピメテウスはいつもお兄ちゃんばかり、いい格好をして自分にも活躍させてほしいと、つまりこの仕事を自分ひとりでやらせてほしいとたつてのお願いをした。兄としてはそこまで弟に言われれば譲ってやるしかない。そこで大張り切りでエピメテウスは獅子には鋭い爪や牙を与え、鳥には翼を、猛獣の餌食になりやすい小動物には繁殖力を与え、それぞれの種族が滅びないように工夫したのだ。なかなかうまくいったと思ったのだが、最後に残った人の種族に何か特性を与えようとしたが、品切れで人はサバイバルできる特性を持たないままだったのだ。」

「それは困ったことになりましたね、プロタゴラス先生、それじゃ人間は自然の中で適応する能力のない欠陥動物じゃないですか。」カリアスは心配そうな表情をした。この欠陥動物論は二十世紀の大戦間時代にゲーレンたちが復活させた。人間は元々自然適応能力に欠けていて、知的能力で補っているけれど、結局は適応できなくなって早晚滅亡する運命にあると不吉な予言に使ったのである。

知恵と火を盗みて人にもたらしめ
プロメテウスは人を救えり

「ええ、カリアスさん、まことにその通りです」と頷いた。「プロメテウスが首尾はどうかと点検にきたら、なんと人の種族は何の特性もなく、これじゃあ獣たちに滅ぼされてしまうじゃないかと、エピメテウスに言うと、エピメテウスは後悔先に立たずで、うろたえるばかりなのだ。そこでプロメテウスは知恵の神アテナイ女神から知恵を、火の神ヘファイストスから火を盗んできて、それを人間たちに与えて何とか、適応できるようにしてくれたのだ。」

ワインがだいぶ回っているせいかカリアスは無邪気に喜んでパチパチ手をたたいた。「いいぞ、いいぞ阪神、じゃなかったプロメテウス。おかげで我々人間は生き残れたんだ。」そこでヒポクラテスが解説しようとした。「つまりプロメテウスというのは人間の想像力、構想力を神としたものですから、人間自身が自分の想像力、構想力を使って、いろんな知恵を思いつき、火の使用方法を考え出すことに成功して自然に適応できるようになったということです。」

窃盗の罪を背負いて大岩に
いましめ縛られてえぐ内臓抉らる

文明の内臓抉らる苦しみは

ヘラクレスならで解き放てまじ

ゴルギアスが続けた。「プロメテウスが哀れな我々人間のために神々から知恵と火を盗んだということで、窃盗の罪を着せられ、岩に縛り付けられて、鷲に毎日内臓を啄ばまれていたというじゃないか、この話はどう分析するのだ、ヒッポクラテス君。」ヒッポクラテスは大声で言った。「人間は知恵や火を使って文明を作り出したためにかえって、内臓を鷲に毎日抉られるような苦しみを負ってしまったということです。結局自分で自分の首を絞めているようなものです。知恵や火はさまざまな富を生み出しました。それを得るために人間は毎日悪戦苦闘しています。そして思うようにいかないと人のものを盗んだり、奪ったりします。それが国同士の戦争まで引き起こすのです。」

ゴルギアスは頷き、「なるほど、では怪力の超人ヘラクレスがプロメテウスを救うという神話はどう解釈するのかね、ヒッポクラテス君。」「もちろんそれは人間がこの文明の苦しみから救われるためには、ヘラクレスのような超人的な努力が必要だということです。だからといってそれは無理だということではなくて、文明の苦しみを克服するために超人的な努力をなさい、そうすれば人間は自ら生み出したこの文明を克服できますよと励ましてくれている神話なのです。」富豪カリアスはパチパチと手をたたき上機嫌だ。「ヒッポクラテス君、なかなか冴えているね。若きソフィストとしてなかなか有望株だ。」

ソクラテスは機嫌を悪くした。「我々はギリシア最大の知性と誉れ高いプロタゴラス先生のお話を伺っているところですから、ヒッポクラテスさんにお話を攫われるのは困ります。」ヒッポクラテスは苦笑して言った。「これは失礼しました。つい便乗しすぎましたかな。」

神々にあこがれ抱く人なれば

祭りて願ふ幸と平安

上村陽一は、文明を人間の自己疎外として分析したヒッポクラテスの見事な分析に感心して聞き入っていたが、話を続けなければならない。「人間の知恵は神々から拝借したわけですから、人間は神々と同じ理性を分かち持っている。そこで人間は神々に憧れと親近感を抱き、神々の像をつくってお祭りし、供え物をしたり、願いごとをしたりするようになったのだ。」カリアスは酔いが廻っていて一言言いたくて仕方がない。「そうなんです、プロタゴラス先生、人間だけが神々を祭る宗教的な存在です。自然の中に神々の大いなる力を感得し、謙虚に祈りをささげます。人間が何でもできると思い上がってはいけない、自然の摂理に従い、神々にすがる気持ちを持つべきです。」

音節を区切りて作りし言の葉で

人は築きし文明の世を

乗りかかった船みたいなものだから、ここにいるんな人間論を披瀝しておこう。上村 陽一は思いつくままに語り続けた。「それから人間は(ここはプロメテウスはというべきだったかな、もういいや「人間は」でいこう)音節を区切っていろいろな音を組み合わせ、それで様々な事物や事象、物事の有様などを表現することに成功したのです。」カリアスは大喜びだ「ブラボー、ついに言語を発明しましたね。人間は言語を使う動物だ、これが最大の特長かな、人間という種族の。なんといっても、言語を発明したことで、人間は意志を疎通できるようになりました。そして知識を共有し、また蓄積し、発展させることができたわけです。言語なしに文化は考えられません。こうしてすばらしいプロタゴラス大先生のお話も伺えないわけだ。」

「ところで徳は教えられるかどうかという肝心の本日のテーマはどうなりました、プロタゴラス先生？」ソクラテスは痺れを切らして催促した。「ソクラテス君、あわてる何とかはもらいが少ないというじゃないか、人間が何であるか分かっていないのに、徳が教えられるかどうか論じることではできないんだ。次に人間は獣たちと違って恥じらいがあるので着物を作った。寒さや直射日光も防げるしね。」

人は何故パンツ穿くやと問立てて

栗本答えぬそれを脱ぐため

「何のためにパンツを穿くか知ってるかね。聖物のアルキビアデス君」ニタァとカリアスは笑った。「そりゃ裸では恥ずかしいからでしょう」とアルキビアデス青年は答えた。「それは表向きの理由だ、本当はいざというときに脱ぐためさ、ハ、ハ、ハ、ハ」傲慢にカリアスは笑った、そういえばこういう下品な人間論もあった気がするぞ、上村は思い出せなかったが、それは栗本慎一郎の『パンツをはいたサル』の人間論である。

人間が作りし物も人間を

語るが故に人に含むや

「家を建てたり、家畜を飼ったり、農作物を栽培したり、人間は食糧を確保し、快適な生活を送るための様々な道具や品物を次々と発明したのだ。カリアスさんコメントどうぞ」陽一はどうせ口を挟まないと気が済まないのだからと、自分からカリアスにふった。「とんでもない、高名なプロタゴラス大先生のお話に、私のような一介の商人が偉そうにコメントするなど恐れ多い。それより人間が生み出した道具や品物が雄弁に人間のなんたるかを語ってくれます。パルティノンの神殿や劇場などの建物や衣装や装飾品、デリーシャスなご馳走など人間ならではの

大阪哲学学校通信 No.37

暮らしが人間の中身なのです。さあみなさんどんどん人間を召し上げれ、人間のお味はどうか？何？道具や建物や衣服やご馳走が人間だ？このカリアスという親父のいうことは、どこかで聞いたことがある。人間でないものを人間だというのは、人間概念を混乱させることにならないか、そういえばあのカリアス親父の顔は見覚えがあるなあ、俺が探していた人物だが、どうにも思い出せない。

ポリスありはじめてながらふ人なれば

ポリス語らず人は語れず

「一人ひとりがばらばらでは何も作り出せません。獣たちや賊に襲われて生き残れなくなってしまいます。」カリアス親父の顔を上村 陽一はじっと見ていると、カリアスは陽一にヒントを与えるつもりか、次にプロタゴラスのいうべき言葉を示唆してくるのだ。

「そうそう、人間論は実はこれからが今日のテーマとも絡んでくるんだ。獣たちや強盗団から身を守り、文明を築き上げるために人間たちは集まって住むようになったのだ。つまりポリス(国家)が生まれた。ポリスなしに人間のサバイバルができないということは、ポリスだって人間の本質的な特徴なのだ。」ゴルギアスは不満げな表情になった。「ポリスあつての人間だということは、ポリスができるまではまだちゃんとした人間ではなかったということですか。とするとそんな未熟な人間がポリスを作るのはなかなか難しいということになるでしょう。」

「さすがだ、ゴルギアスさん。あなたの仰るとおりです。だから身を守るためにポリスを作ったものの人間たちはまだ未熟だったので、わがまま勝手に振る舞い、ポリスを自分のために利用しようとはするが、ポリスのために自分が犠牲になるのは真っ平だというような態度をとる。

そのうえほかの市民たちを自分の考えに従わせようとはするが、他人の意見には耳を貸そうとはしない。長老やポリスの功労者にも敬意を払わないで生意気な口をきく。そういう連中がのさばってトラブルが頻発し、ポリスの機能が麻痺してしまうことになる。」カリアスはいてもたってもいられない。心配を満面に表現して、「ヒャー、大変だ、神様じゃなかった、プロタゴラス先生何とかしてください。」

つつしみと戒めの徳とふべし

死に値ふべし弁えなくば

「そこでゼウスの神が登場する。」とプロタゴラスがいうと。ゴルギアスは「おやおや困ったときの神頼みですか」と揶揄した。ヒッポクラテスが助け舟のつもりか口を挟んだ。「ゼウスはコスモス全体のまとまりをあらわす神ですから、ゼウスの命令に従うということは自然のおきてにのっとるということなのです。自然のおきてに従わなければ何事もうまくいかず、人間のサバイバルもできません。」ソクラテスはどうもヒッポクラテスの口出しが気に入らないらしい。「わたしたちはプロタゴラス大先生のお話を伺っているのですから、ヒッポクラテスさんが大先生のお話を補足されるのは、いかがなものでしょう、興味が殺がれますし、先生にも失礼に当たるのではないのでしょうか。」ヒッポクラテスは少しむかつきながら言った。「これはお気を悪くされたら、すみません。ゴルギアス先生のご発言に刺激されてまして。」

プロタゴラスである上村 陽一は落ち着いて続けた。「なんのなんの、あなたの発言は決して邪魔にはなっておりません。若者が的確な発言をされるのを聞くと末頼もしいもので、大変喜んでおりますぞ。全能の神ゼウスは、使者ヘルメスを呼びつけまして、人間たちの滅亡を防ぐために〈つつしみ〉と〈いましめ〉を与えること

にしたのです。」「よお、大統領！じゃなかったゼウス！待ってました」とカリアスはワインをこぼしながらグラスを上げた、ソクラテスにらみつけられたので、それ以上の発言は控えた。

「ヘルメスはこうゼウスにたずねた。『その二つの徳はつつしみを分配される者と、いましめを分配される者に分けて分配するのですか？

それとも全員がつつしみといましめを持つように分配するのですか？』ゼウスは答えた。『もちろん全員がつつしみといましめを持たなくてはいけない。それでないとポリスの秩序は成り立たない。もしこの二つの徳を持つ能力がない者がいれば、死刑に処すとお触れをゼウスの名において制定してもらいたい。』

ヒッポクラテスは驚いて叫んだ「そりゃあちょっと厳しすぎますよ、つつしみやいましめといっても程度があります。プロタゴラスさんの言い方だとかいつは生意気だというだけで、死刑にされてしまいかねない。」たしかにそうだ、陽一はおぼろげな記憶を頼りに論じているだけに、このくぐりはどうもおかしいと思った。でもここがポイントだったはずだ。

カリアスが救いの手を入れてきた。「いや、これはポリスの上に個人を置いてはならない、あくまでもポリスの団結と平和を優先すべきだという原理ですから、それをわきまえないと死刑だというのは自然のおきてにかなっていません。なにも少々生意気だとすぐ死刑という意味じゃないのです。それは細目を定めるときにこれこれの程度までいったら死刑ということにすればいいわけです。」

陽一も一安心した。「カリアスさんの仰るとおり、ここがポイントなのだ。つまり人間は頭がよくて、いろいろ便利なものを作ったり、言葉で意思を疎通しあったりだけでは生きていけな

い。人間はポリスあっての存在なのだ。そしてそのポリスは、ポリスの秩序に従えないものを死刑にできる暴力装置を備えていなければ成り立たないということなのだ。つまり人間を論じるためにはポリスの暴力装置まで含めて論じなければ、人間論としては不十分だということなのだ。」

ポリスをも人と捉える人間観、
個々の市民はそれを構成す

カリアスは大感激だ、「全く全く同感です、プロタゴラスさん。ポリスも含めて、人間であり、個々の人間はその構成員だということですね。ただ個々人だけを人間とみなす人間観だけでは不十分だということでしょう。」

ソクラテスが発言を求めた。「人間論としてはなかなか素晴らしい。大いに勉強になりました。ところでプロタゴラスさん、徳は教えられるかどうかという肝心のテーマはどうなったのですか。」

「おやおや、私の話を聞いていなかったのかね、だから、つつしみといましめをいくら教え込んでも身につかないで、ポリスを破壊する連中は死刑にしろということだから、ほとんどすべての市民たちは徳を教えられているからポリスがこのように繁栄しているということなのじゃよ、ハ、ハ、ハ、ハ」プロタゴラスはソクラテスを笑い飛ばしたので、一同が大笑いになった。ど

うも陽一の感では、このあとソクラテスにプロタゴラスがやり込められるいやな展開が待っていそうである。そうならないために、話を終わらしたかったのだ。

カリアスもこれ以上の議論は必要ないと考えていた。なぜならこれは彼を演じている榊周次の「人間論の穴」なのだから。このままプラトンの『プロタゴラス』に準拠していると、プロタゴラスは徳を教えられるというが、肝心の徳の中身である知恵・勇気・節制・正義などの徳の定義ができていないので、徳のなんたるかを知らないことになり、徳を知らないでは、たとえ徳が教えられるものであっても、プロタゴラスには教えられないことになると、プロタゴラスの無知を暴露されることになっているのだ。

カリアスが手をたたいた。「さあさあさあ、今夜はすばらしいシンポジウムだ。酒を酌み交わし、ご馳走を共にしながら、知を論じ、人間を論じる、これがシンポジウムということですからね。今夜は特別にペルシアの東の果ての向こうの国から取り寄せた酒があります。これがなかなか美味でして、皆さんに振舞わせてください。それから徳は教えられるかどうかの議論の佳境に入ることにしましょう。」

みんなで一斉に飲み干したが、陽一は急に眠気がさしてきて意識を失った。どうも眠り薬が仕込んであったようである。



大阪哲学学校 2006 年（第 12 回）総会報告

大阪哲学学校運営委員会

標記総会を、2006年11月4日尼崎労働福祉会館会議室にて開催しました。総会は、出席7名、委任状提出18名の計25名により成立し、午後3時から6時まで運営委員会提出の総会議案を審議のうえ承認しました。主な内容は次の通りです。

1) 今年度の反省と今後の課題

【会員の異動と現状】

会員総数42名（前総会より1減）：一般会員18名（同1減） 維持会員24名

- ・新規入会者はなし
- ・昨年末より登録期限切れの会員が多数あり、正確な会員数の把握自体できない現状にある。これは主として会員登録更新依頼の事務が滞っているためであるが、昨年総会でも問題になった会員制度の形骸化（電子メールでの無料案内の普及により、特に一般会員になるメリットが希薄になりつつある）がいつそう進んでいることもある。会員制度自体の根本的な見直しも必要になると思われるが、当面は電子メールで案内する場合の年会費を割り引くなどの措置を運営委員会で検討したい。

また、参加費についてこれまでの学生・院生割引に加えて、年金生活者に対する割引も自主申告の形で導入し、経済的理由で参加しづらいことがないよう配慮したい。

【催しならびに参加者の状況と問題】

- ・前総会以降の催し数（夏合宿を含む）17回（前年比－4回）
- ・例年は9月から夏期休暇後の催しを再開させたが、今年度はひと月遅れの10月スタートになったこともあり、年間の催し回数（平均20回前後）

が減少した。

・昨年度から始めた「〈知の歴史〉入門講座」は、6シリーズがほぼ終わろうとしている。哲学学校ならではの催しとしておおむね好評であり参加者も一定数確保されている。このシリーズの継続・充実が今後の活動の柱になるだろう。

・ただ、全体としてみると参加者数が少ない状況は変わっていない。他の運動体との催しの相互案内やホームページのリンク、新聞社への働きかけ、活動紹介冊子づくりなど、昨年総会で取り上げられた課題はほとんど実行されないまま1年が経過した。その最大の要因は、仕事・病気・介護などで運営委員に時間とエネルギーの余裕がほとんどない状態が続いていることである。この問題は昨年も総会で取り上げられたが、高齢化の進行や個々人の事情があって、哲学学校として有効な対応策を講じることは難しく、出来るところから地道に取り組む以外にない。

【運営面での問題と課題】

・上述のように、一昨年の総会から運営委員の活動力の大きな低下が問題となっている。即効性のある打開策はないが、これから定年退職を迎えて時間的に余裕ができる会員にこれまで以上のコミットを期待できることと、数は少ないが大学院生の参加が生まれていることから、両者のパワーを活かしてもらおうような受け皿を哲学学校としてもうけ、世代交代も含めて現状を打破する手がかりとしたい。

2) 各活動分野の状況と個別課題

1. 広報活動について（伊元委員より）

〈今年度の反省として〉

仕事と今年の自治会担当業務が思いのほか多

くあり、また PC の信頼性が確保できず、皆さんにご迷惑をおかけした。メーカーの PC に代え今は接続確保はできたと思うが、その間のホームページの会議室のスパム投稿による妨害を対処できず、現在も投稿者の利用に応えられなくなっている。

会議室ソフト作成者による新たなものを年明けに発表するまでは閉鎖はしないが、プロバイダともっと相談して対処できるかを見ている。

催し情報だけは KEEP したく、早めの内容確定を企画担当者をお願いする。

2. 「通信」について

・この1年間に34号～36号を発行した。何とか昨年度並みに発行できたが、昨年総会でも問題になったように、投稿数自体が急速に減少し、定期発行ができなくなっている。準備中の37号も、現在寄せられている原稿は保井温さんの1本と野村光夫さんの短い短信だけで、発行できる目処はたっていない。スタッフからの投稿も途絶えている。催し参加者に会員になってもらい、新しい投稿者をひとりでも多く確保したい。

3) 財政について

・会員の項で述べたように、更新依頼事務が長期間滞っていたため、年会費収入が著しく減少したため、昨年度から一転して大幅な赤字決算となった。現状のまま放置すればあと1年で活動資金が底をつくが、更新依頼を早急にすることでこの状態はかなり改善されると思われる。まずは現行会員の更新を確実にお願いするとともに、会員未登録の参加者に会員になるよう働きかけをしたい。

4) 2007 年前半までの企画

- ・1月27日 新年会員・参加者交流会（確定）
- ・山本校長の開講講座「ジョン・デューイと思想としての憲法第九条」（仮、3回）
- ・連続講座「憲法九条の思想」（仮、3回）
- ・〈知の歴史〉入門講座第7シリーズ「グラムシ入門」（仮、3回）
- ・教育の現状と人格形成の今日的条件（仮、3回）
- ・他にも、「映画と対談の会」など計画

5) 第12期運営委員会人事

- ・校長（兼参与）：山本晴義
- ・参与：笹田利光、木村倫幸、田畑稔
- ・運営委員・伊元勇、高根英博、中村徹、西山覚、平等文博（委員長）、山口協

藤田友治追悼集 刊行

▽大阪哲学学校の会員・講師であり、歴史・哲学研究所長、大阪経済大学ほか教師としても精力的に活動中、二〇〇五年八月に急逝された藤田友治さんの追悼集「ともに生きる」が、刊行会（藤田美代子発行、梅川邦夫編集）によってこのたび出版されました。追悼集には、藤田さんの多方面での活躍を示す百人余りが寄稿し、哲学学校からも山本・田畑・平等・宮前・義積が追悼文を寄せています。また、子どものころからの写真や自筆メモ、年表など藤田さんに関する資料も多数収録されています。

▽講読をご希望の方は、1部千円（送料1冊300円、2冊450円）を郵便振替 00910-8-149051「歴史哲学研究会」に宛てご送金・お申し込みください。

